

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：28001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370901

研究課題名(和文) 14～16世紀中国貿易陶磁の調査研究 - モンゴル時代から大航海時代への転換 -

研究課題名(英文) A Study of Chinese Trade Ceramics from the 14th century to the 16th century
-Changes from the Mongolian era to the Age of Discovery-

研究代表者

森 達也 (MORI, TATSUYA)

沖縄県立芸術大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：70572402

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：14～16世紀はモンゴルの海の時代から大航海時代へと東西交流史が大きく転換する時期である。該期の中国貿易陶磁は世界各地で発見され、東西交流史などの研究や、各地の遺跡の年代を決定する基準資料として極めて重要な資料であるが、まだ十分に研究が進んでいない部分が少なくない。本研究では、該期の貿易陶磁を生産した、景德鎮窯(江西)、龍泉窯(浙江)、福建・広東諸窯などの古窯址と出土遺物の綿密な調査を行なって、詳細な編年を確立し、その基礎データをもとに、東アジアや西アジアで発見された沈船資料、港湾遺跡や都市遺跡などの出土資料を詳細に分析し、中国貿易陶磁流通の経路、地域ごとの受容陶磁の特色などを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：From the 14th century to the 16th century, the history changed dramatically from the Mongolian era to the age of discovery. China trade ceramics of this period are discovered in various parts of the world and are extremely important materials of historical studies and archeological studies, but research is still insufficient. In this research, we thoroughly investigated old kiln sites Jingdezhen kilns, Longquan kilns, Fujian and Guangdong kilns that produced trade ceramics during this period, and established chronology of trade ceramics in these kilns. Based on these chronologies, I analyzed excavated materials from shipwrecks harbor ruins and urban ruins in the East Asia and West Asia, and reveal the route of trading Chinese ceramic and types of imported Chinese ceramics by region.

研究分野：陶磁考古学

キーワード：貿易陶磁研究 陶磁考古学 中国考古学 東西交流史

1. 研究開始当初の背景

14～16世紀はモンゴルの海の時代から大航海時代へと東西交流史が大きく転換する時期である。該期の中国貿易陶磁は世界各地で発見され、東西交流史などの研究や、各地の遺跡の年代を決定する基準資料として極めて重要な資料であるが、まだ十分に研究が進んでいない部分が少なくない。

2. 研究の目的

14世紀～16世紀までを研究対象とし、該期の貿易陶磁生産窯址出土資料と各地で発見されている沈没船引揚げ陶磁、各地の都市遺跡や港湾遺跡で発見された資料を比較研究し、当該時期の中国陶磁の貿易システムを解明し、モンゴルの時代から明朝の海禁時代を経て、大航海時代にいたる東西交流の大変革期の人と物の動きを明確化することを目的とする。

3. 研究の方法

当該期の貿易陶磁を生産した、景德鎮窯(江西)、龍泉窯(浙江)、福建・広東諸窯などの古窯址とその出土遺物の綿密な調査を行なって、貿易陶磁の産地同定と編年の精度を高め、その成果を基に、消費遺跡や沈没船で発見された中国貿易陶磁の実見調査と再分類を実施して、生産地と生産年代の再確認を行なった。こうしたデータを基に、各地域の時代ごとの中国貿易陶磁の流通状況や地域ごとの受容陶磁の特色などを明らかにした。

4. 研究成果

中国・元時代は、中国陶磁の大変革期であり、同時に膨大な量の中国陶磁が中国から世界各地に運ばれた時代でもある。当該研究では、モンゴル時代前後の時代の沈没船や都市遺跡の出土陶磁の組成や器種の比較研究を行い、この時代の技術の発展や人とモノの移動・交流の変化について調査・研究を行なった。ここではまず、鷹島海底遺跡で発見された中国陶磁について考察し、次いで、モンゴル時代前後の陶磁流通の変化についてまとめる。

(1) 鷹島元寇遺跡発見の陶磁器

まず、鷹島元寇遺跡発見の陶磁器の様相を見てみると1281年5月に韓国・合浦を出港した蒙漢軍と高麗軍からなる東路軍約4万2千人と、6月に中国・寧波を出発した江南軍約10万人が最終的に終結した鷹島沖で、7月30日夜の暴風により多くの軍船が鷹島付近で沈没したとされている。

鷹島海底遺跡は二度目の元寇である弘安の役(1281年)に関わる遺跡と考えられており、元軍の船と考えられる木造船の船体の一部や碇、武具類、武器類、漆器、金属器などとともに中国陶磁が発見されている。

中国陶磁は、大部分が宜興窯をはじめ江蘇

省南部から浙江省北部で生産された褐釉四耳瓶・四耳壺・瓶で占められ、そのほかに浙江の龍泉窯青磁や福建の白磁、青磁、黒釉天目形碗など華南地域の陶磁器を中心に、磁州窯系の褐釉四耳壺、鈞窯青釉磁など華北の陶磁器も少量発見されている。こうした陶磁器の多くは、1281年の弘安の役に関係する可能性が高く、日本派遣の元軍の船上で用いられた陶磁器の実像を知ることができるだけでなく、陶磁器の編年研究する上でも重要である。

最も多く発見されている褐釉四耳瓶・四耳壺・瓶は、江蘇省南部の宜興窯から浙江省北部の一带で宋時代から明時代初期頃まで生産されたもので、日本の陸上の遺跡でも発見されることがある。韓国の南西部で1323年に沈没した中国から日本に向かった貿易船である新安沈没船からも数多く発見されている。中国の遺跡では井戸など水にかかわる遺構から発見されることが多いことから液体を入れるための容器と考えられている。中国では南宋時代に金軍と戦った將軍・韓世忠(1088～1151年)の軍隊が用いたとされて「韓瓶」と呼ばれている。これらは、恐らく元軍の軍用品または船舶用品の液体容器であったと考えられる。

2011年に出版された報告書『松浦市鷹島海底遺跡 総集編』では、発見された陶磁器1307点の内、壺や甕などの貯蔵具が1110点を占め、その内96%の1066点がこの褐釉四耳瓶・四耳壺・瓶で、陶磁器全体の82%を占めている。

浙江省南部に位置する龍泉窯で焼かれた青磁は盤や碗、杯などが発見されている。器形や底部の造形などから見て、13世紀後半から末頃の特徴を持っているものが主体である。ただし、この最後の資料については一見すると12世紀末から13世紀初頭の特徴に近いが、底部の形態は古いタイプのものとはやや異なり、13世紀後半に位置付けても問題ないと思われる。

福建省で生産された陶磁器の碗などは、連江窯や福清窯など福州周辺地域の製品が主体で、瓶や壺などの貯蔵容器は泉州の南に位置する磁窰窯の製品が主体を占めている。福建の青磁碗には無紋のものと同面に太い線で蓮弁紋(蓮の花びら)が描かれるものがあり、どちらも福州北部に位置する連江・浦口窯の製品に近い。天目碗は福州南部の福清・東張窯または閩侯窯の製品と近い。口縁部の端部に釉が施されないことが特徴の口禿白磁碗は、13世紀後半から14世紀前半頃の日本各地の遺跡からも数多く出土しているが、鷹島で発見された口禿白磁は、日本の遺跡で出土するものとは器形や底部の造形の雰囲気少し異なる。こうした白磁は福建省北部から浙江省南部の地域で生産されているが、日本で多く見られるタイプがどこの窯で焼かれたかはまだ明らかになっていない。

次に華北地域や朝鮮半島の製品をみてみ

ると、華北の陶磁器には鈞窯系と磁州窯系の製品がある。鈞窯系の青釉磁器碗が数点発見されているが、こうした製品は河南省、山東省、河北省、山西省など華北の広い地域で生産されており、必ずしも河南省・鈞窯で焼かれたものではない。鈞窯系の陶磁器は、日本の陸上の遺跡ではほとんど出土した例がなく、杭州や寧波など中国江南の遺跡でもほとんど出土しない。一方、中国北部からモンゴル地域や朝鮮半島では数多くみられる。こうした鈞窯系青釉碗が鷹島で発見されていることは、中国北部と高麗の兵から構成された東路軍との関係を物語る資料として位置づけられる。磁州窯系の四耳瓶は、前述した宜興窯などの褐釉四耳瓶と比べると口が細い器形で、これも東路軍と関わる資料である可能性が高い。高麗の象嵌青磁は器形や施文は14世紀の雰囲気をもつものであるが、こうしたタイプが13世紀末段階で出現していた可能性はある。

こうした鷹島元寇遺跡発見の陶磁器の産地から、東路軍と関係すると思われる華北や朝鮮半島の製品はごく少量で、大部分は江南軍に関わるとと思われる中国南部の製品で占められていることがわかる。こうした比率は、江南軍10万人・3500艘、東路軍4万2千人・900艘という兵数や船数の差を反映しているとともに、江南軍はほぼ壊滅状態であったのに比べて東路軍は約7割の兵が帰国しているといった被害の大小も影響していると思われる。

なお、鷹島海底遺跡発見の陶磁器は、部隊や軍船で使用された可能性が高い資料であり、当時の中国陶磁の一般的な流通状況を示すものではなく、同時代の貿易陶磁とは様相がかなり異なっている。

(2) 中国陶磁史上のモンゴル・ショック

次に、中国・元時代に中国陶磁の様式や流通にどのような大きな変化があったかについて検討する。まず、陶磁器の器形、装飾、組成の変化、次いでその流通の変化について紹介する。

陶磁器の器形、装飾、組成の変化

まず、モンゴルが中国侵入する前の段階の中国陶磁の様相を示す資料として1240年前後にモンゴル軍が中国南部の四川省に攻め込んだ際に形成された可能性が高いとされる四川省遂寧金魚村窖蔵から出土した陶磁器を見てみると、この窖蔵からは985点の陶磁器が出土し、その内龍泉窯青磁355点、景德鎮窯青白磁604点、耀州窯青磁2点、定窯白磁8点、四川陶磁16点という構成である。

この段階の陶磁器の内、龍泉窯青磁は蓮弁紋以外にはほとんど紋様がないが、景德鎮青白磁、白磁は劃花紋や貼花紋など豊富な紋様が施されている。高さ30cm程が最も大きい器種で、大形製品は少ない。

しかし13世紀後半になると変化が始まる。

鎌倉・今小路西遺跡の高級武士の屋敷の火災層からまとまって出土した陶磁器は、13世紀後半から末頃の様相を示している。龍泉窯青磁は貼花紋などの装飾が豊富になり、大形盤などの大形器種が出現している。景德鎮窯の製品はまだ大きな変化は認められない。

そして14世紀前半になると変化はさらに顕著になる。

1323年に中国・寧波を出港し博多に向かう途中で韓国・新安沖で沈没した新安沈船からは2万点を超える中国陶磁が発見されたが、龍泉窯は60cmを超えるような花瓶など大形器種が出現し、瓶や壺、盤、鉢など大形製品が目立つようになる。装飾は貼花紋、劃花紋、刻花紋、鉄斑紋などが多用され、元時代の特徴とも言える馬上杯が出現する。

景德鎮窯の製品は、釉裏紅、鉄斑紋、鉄絵など新たな装飾技法が生み出される。新安では発見されていないが、この時期にコバルト顔料を用いて絵付けをする青花磁器が誕生しているが、生産が本格化するのには14世紀中頃である。

生産が本格化した14世紀中頃の例として、江西・高安窖蔵と河北・保定窖蔵出土陶磁が挙げられる。この段階の龍泉窯青磁は前段階とそれほど大きな変化はないが、前段階に誕生した景德鎮窯の青花磁器はこの段階に生産が本格化し、壺、瓶、梅瓶、鉢、盤などの大形器種が盛んに作られた。

こうした元時代に起こった器形の大形化、装飾の多用、色彩装飾の誕生、青花の誕生などは、新たな支配者であるモンゴル人と、彼らとともに中国に入ってきた色目人(中央、西アジア、ヨーロッパ人)の嗜好にあわせるために起こった変化である。

流通の変化

次に流通の変化について触れておきたい。

モンゴルが中国全土を支配する前の南宋時代に、すでに海上交通路による中国陶磁の輸出は盛んに行われており、日本、東南アジア、南アジア、西アジア、東アフリカ、地中海地域に龍泉窯青磁、福建陶磁、景德鎮陶磁、広東陶磁などが輸出されていた。

当該研究において2回のペルシア湾北岸の都市遺跡の調査を実施したが、ここでの調査によって、南宋時代から元時代の急激な中国陶磁貿易量の増大化を確認することができた。

旧ホルムズ王国の港湾都市遺跡で、13世紀末から14世紀初頭の膨大な量の中国陶磁を確認し、この時期に中国陶磁の貿易量が激増したことが明らかとなった。ここでは、龍泉窯青磁が最も多く、次いで福建陶磁、少量の景德鎮磁器と広東陶磁が確認された。14世紀初頭にホルムズ王国は現在のホルムズ島に拠点を移し、この港湾都市遺跡は放棄されたとされており、中国陶磁の年代からもそれを裏付けることができる。

キーシュは13・14世紀にホルムズ王国と

抗争を続け 1420 年代にホルムズに敗れ、以後衰退した。ハリレ遺跡はキーシュの中心的な都市遺跡で、ここからは 13 世紀から 14 世紀中頃の遺物が豊富に確認されている。中でも 13 世紀末から 14 世紀前半の中国陶磁の量が最も多い。龍泉窯青磁が最多で、次いで福建陶磁、少量の景德鎮磁器と広東陶磁という旧ホルムズとほぼ同じ組成が確認されたが、旧ホルムズよりやや新しい時期の中国陶磁が多く、景德鎮の青花磁器も確認されている。

その他、インドネシアのトゥバン遺跡やタイのスコタイ遺跡などでも同じような、龍泉窯青磁、福建陶磁、景德鎮窯陶磁という組成が確認されている。なお、東南アジアや西アジアではこれらの陶磁器のほかに磁州窯系陶磁が共伴することもある。

内蒙古など中国内陸の遺跡で出土する陶磁器は様相が異なる。内蒙古・集寧路遺跡と内蒙古・燕家梁遺跡は元時代の交通路の駅に関わる都市遺跡であるが、どちらからも景德鎮磁器、龍泉窯青磁などの中国南方の陶磁とともに華北の磁州窯系や鈞窯系の陶磁器が大量に出土しており、モンゴルのカラコルム遺跡などでも同様の組成が確認されている。中国北方の内陸部ではこうした江南陶磁と華北陶磁が共伴する組成が確認されている。

元時代の日本向けの陶磁器の輸出は、他の地域とやや様相が異なる。日本向けの貿易船である新安沈船の陶磁器の組成を分析すると、約 2 万点の中国陶磁の約半分は龍泉窯青磁、3 分の一は景德鎮磁器で占められ、他に福建陶磁、浙江陶磁、江西陶磁、広東陶磁などの華南の陶磁器のほか、磁州窯系陶磁や定窯白磁など華北の陶磁も含まれ中国各地の陶磁器が含まれる。こうした状況は出港地の寧波や、寧波に近い巨大都市・杭州で消費された陶磁器の組成と近いことがわかる。さらに一時代前の茶道具なども含まれていた。元時代に日本に運ばれた陶磁器の組成は当時の江南地域の陶磁器消費状況を反映していると考えられる。しかし、量的には 14 世紀の中国陶磁の出土量は 13 世紀よりも少なく、この段階に世界の他地域に運ばれた中国陶磁が激増した状況とは異なる。これは元寇以降の日元間の微妙な交流関係が反映していると思われる。日本の貿易船は元寇以降も寧波に赴いたが、元は日本を敵性国家として警戒し日本商人への管理も厳格であり、また 14 世紀前半に日本商人が寧波で暴動をおこすことなどがあったために貿易量は安定しなかったと思われる。

元時代に入った 13 世紀末頃から東南アジア、西アジア、東アフリカなどでは中国陶磁の出土量が激増し、その組成は龍泉窯青磁を主体に、福建陶磁がそれに次ぎ、景德鎮磁器、広東陶磁が少量、稀に磁州窯系陶磁というものであった。同じころから中国北部からモンゴル一帯の内陸部での中国陶磁の流通も活性化し、華北の磁州窯系陶と鈞窯系陶磁を中

心に華南の龍泉青磁、景德鎮磁器なども運ばれた。日本は他の地域とは異なり、14 世紀になると中国陶磁輸入量は減るが、龍泉窯青磁、景德鎮磁器を中心に中国各地の様々な産地の陶磁器が輸入された。

こうした陶磁器の流通状況の変化から、当時の人間の交流が変化した状況を知ることができるのである

おわりに

陶磁器という「モノ」を研究材料として元寇遺跡と元時代の陶磁器生産の変化、流通の変化について述べた。こうした「モノ」を詳細に分析し、研究資料化することによって、人間の活動の変化、感性の変化、交流の変化などを知ることができるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

森達也、新安沈船発見中国陶磁の組成研究、美術資料 90 (韓国) 査読無、2016、109 142

〔学会発表〕(計 4 件)

森達也、陶磁器から見た蒙古襲来、国際シンポジウム「ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト」(招待)、2016 年 12 月 10 日、昭和女子大学 (東京都世田谷区)

森達也、生産地から貿易陶磁を見る、日本貿易陶磁研究会第 40 回研究集会、2016 年 9 月 17 日、立教大学 (東京都豊島区)

森達也、新安沈船発見中国陶磁の組成研究、新安沈船発見 40 周年記念国際学術シンポジウム (招待)、2016 年 9 月 2 日、国立中央博物館 (韓国・ソウル)

森達也、伊朗発現中国陶磁的研究、国際学術研究会、「中国陶磁史研究取径」、2016 年 1 月 29 日台湾大学芸術史研究所 (台湾台北市)

〔図書〕(計 1 件)

森達也、中国青磁の研究 生産と流通、汲古書院、2015、278 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 達也 (MORI, TATSUYA)

沖縄県立芸術大学・美術工芸学部・教授
研究者番号：70572402